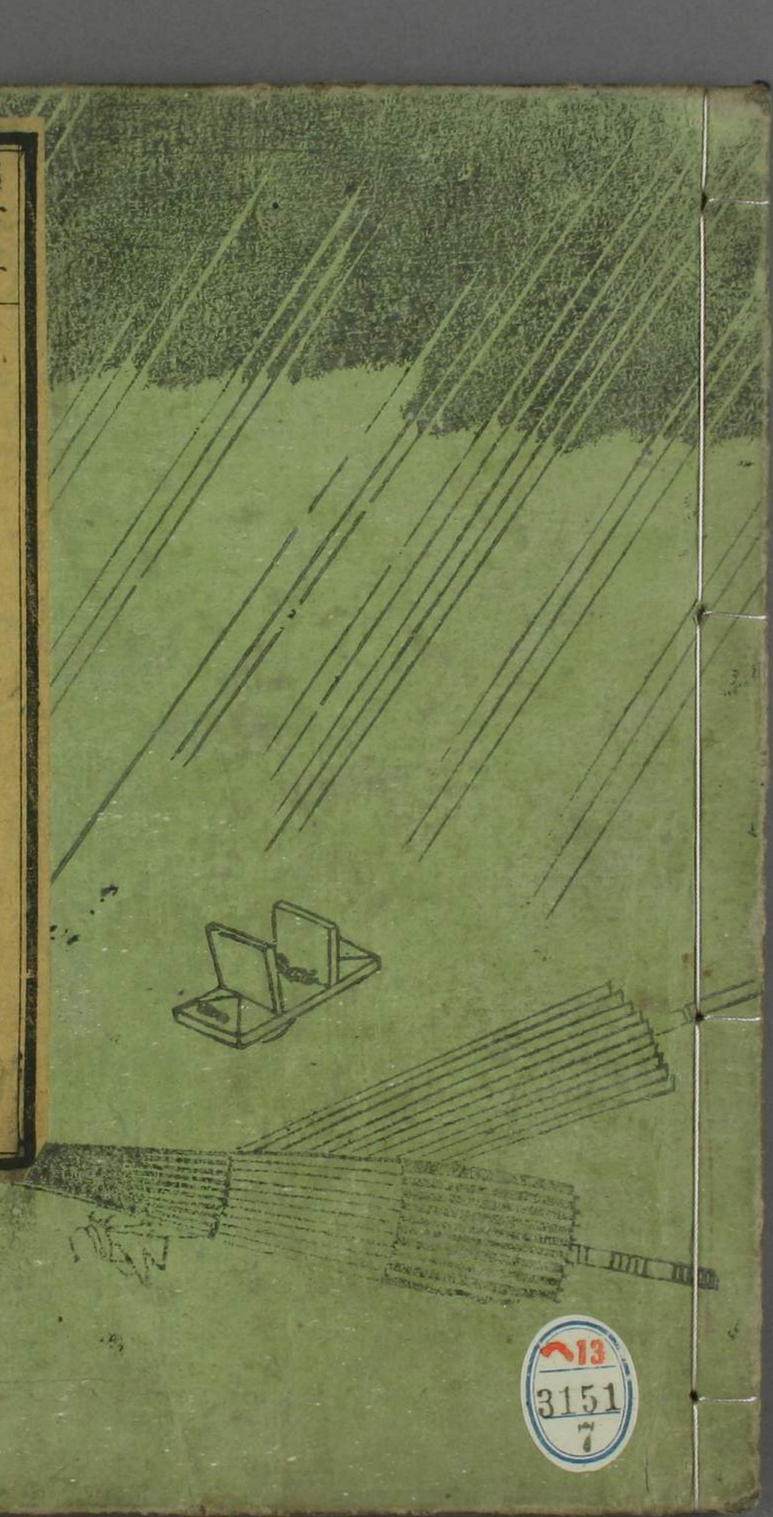
名古屋
山三郎
不破
伴左衛門

繪本稲妻表紙

七



へ13
3151
7

特
へ13
3151
7

ふ餘儀なくなりて。今ハも凍死ぬべき形勢なり。嘉門氏ハ俄に思ひ
さだめ堪忍づよき人なり。覆面ふて面へ出うとうへざれども
侍のかくも嚴寒といふ体。つくづく何ぞひつめたる支あるんと舌
を卷てゞ居たりとかける。湯ふ伊尹と得周ふ太公望とをもちひたるも大
將たる人賢を尊び敬志の厚ゞ是なり。總て国家を治るの要賢臣
ふあらず。賢臣を得ふ礼讓とあつくもざれば出て仕へゞ。禄を施し金
帛を以て招くとも。賢士とそぶ志ある人ハ仕ふる支なしとゝ初その
時嘉門のそばちかくゝもとかの雪中の旅人ハ何者ふ。ゆゝしくもの気
の毒の形勢なり。おん心ふかるハさる者なるべ。理とのべてゝおん故ゝなされ
ぬ。某出ておひ申しやさんとのべいなくそちハ多ふだらぶどあ侍
そちが留主ふ両度まで来りてさぞ。ぐのたのゝ支我心ふかゝるのつゝもぞ。

うみがふ尽に様もなく飯つるが。又今日も来りてそちふあひたき望なれども。仕官さそる心なければ。とかく人ふあいさあふまくだぐ〳〵どもかねてゑひて他行といろいろ申さんとそろふ。まく〳〵飯宅を待んとてあのごとく寒気ふ苦しむたらけ者。此方の心も察せど長居そるうつけ人。もくそちとあらとだに尽ふあらどど。かの若者ふ命じて追飯そふ。まこ。とのひて若者をちづけ。俄ふ詞をかてのひけるハ。汝さるなど奴僕ふ。おのとのひる詞ふよそやしつる支あるの雪中の侍を汝が辨舌をなそおひかつせ。ふいふも嘉門ハ他出せ〳〵とのひて。是非ともかつをとのひつてれい若者ふけ。あらそ。其侍を玄の手柄をしめふおんを手ふあるる馬麻者をおひかへそそ。さんとのひて。外のかふ立いて。ふく旅人ふんすのまで待そそも。あらじ嘉門の飯宅のわと何の時と

そそ〳〵もれば若日もそれるべ雅儀のうへの雅義ふ〳〵んとく〳〵〳〵〳〵。とのひる手をそそてぴれたそてんと世。新とそて仰天し。貴君ハ由理之助勝基公ふあるどや。此ふん姿ハ何ふ成ぞとふ驚て恭礼ふ行ひ。官領職のおんオを以て。一人の従者をも召具せ〳〵れどかろじきふ御容体のぶかーさと相のる。勝基ハこの人を。桂之助国知ふそそれども。言の答なく。唯拳を握り歯をかゝ噛めて。寒気ふたへざる様子なり。桂之助そそづき。某おん舘義政公の御気色を損じ。濱名入道殿の御内意ふ〳〵て父の勘気をうけ分なれべおん詞をなる〳〵も理なり。かる大雪をいとひあらどど。自ハ家ふいそそふと察そふ嘉門を軍師ふ召抱おんん結構ふ存ぞるなり。某今日も此山中ふいそり心を尽して嘉門ふ近づきひも別意ふあらどど。曽ておん舘

嘉門が編たる武道徒然草とのふ冊を御懇望ありとのことなれども
ふかく秘して他見をゆるさざる若き義命を以て召上らるる時へかの冊
を焼て灰をかくさんと必定あるりとて。これまでその方沙汰もあ
ざりき某偶ひるをゐひいでしたてまつる嘉門に誠心をゑんせかの
冊を得てちん館ふたてまつる。そもそも微功ことなりて父の勘気赦
免の御内意を願ゆるん為ちりとかくるとば。勝基尻目ふかけその
方放伏无慙ふして。ちん館の御不奥をかうふる父の勘気をうけ
たる者ふ。かくとばに詞なりとのるゆへ。桂之助げふ理とその方の
科を後海とかくつゆ嘉門親子ふ勝基どのとおあけのひて味方ふ
つけ。せうその功ふるとべーと心のうちふろひろ〻おもわれて内ふ入れ
老母の前ふひざをゆづく。老母ゐるるるり。かの馬庶者いるるるつゆ理

いふてけるとゆへさるぞ。汝い案外なる不調法ものなるさべるるいひかひなくて此
家ふ足をとどめ。嘉門を師とたのく。兵法の道をとるとるるんことゆへ
うかるふるるとそ。かくそ奴僕と召仕ふ。その恩めゆく戒ごるとば不を
公とるものぞとゆひて。一ツの服紗包をとりてさんぐふ打擲をとゆへども桂
之助露ぞりも怒るいろる。某が宿願成就とるまでかりちる憂目ふ
あふとも。武家をゆる心ふ〻どおを気ふかけぬ支あるとて。たとへ打殺
さるるとも。せんとべる。ばりへのお情ふ。かの雪中の侍ふ嘉門どのを
ゆん引合せてごきれ。支の子細をおん同ものとゆ。簀子のうふ額を
つけ。涙をぐるふれぐふ形勢。誠ふ哀の姿ふて。ろひ入てぞえ〻たるける。
かるる折も納戸のるるるをさとひらけて立出る骨柄白糸縅ふ銀の
鐔縅したる腹巻の上ふ萌黄錦の陣羽織を着。青鈍の大口ろた。

黄金作の丸鞘の太刀をたき文曲武曲の二星を画たる軍扇を把て立出たる為体志氣堂々威風凜々として誠に一個の英雄と見えたり。桂之助仰天し。何人ぞと顧ふ是乃別人にあらず梅津嘉門景春なり。こは嶢々敷打扮ぞといぶかりけるに嘉門門外に出勝基をいざなひいれて上坐にすゑ桂之助の手をとりてその次におしめ老母もろともるるにふくり平伏して恭礼をおこなひ。まづ勝基にむひていひけるは。某がごとき不肖の者を。はるばる御懇望あるる段冥加にあまる仕合こ頃日某が他行のあとに両度までおん駕を枉らるゝ。母の物語にうけたまわれども。勝某公とは面識もなきまんだ。某のさる虚名をきゝとこれまで諸国の諸侯より。召抱んと使者の来往きはげしとはいへども。その大将の心ゆゑ。いづれも皆高禄をあたへ。奇士をもとめられ

軍師をもとむる礼義をもつぶさに只權威を以て招くにあらず。当代諸侯おのゝ〳〵。主君をたのむ人をもとせるなくて居るにふ。驚入たる公のおんふるまひ。官領職のあるにおんみを以て唯一人の従者とも具せられ。雪中の寒気をものゝ。雪やも權威のいろなく。某一人をおん招きあるんとこそ。ばかりおんむをくだれ。むなる段。元勿体なくもかたじけなくおん招にふまつるべきを麾下に属するのまこしに兵具を帯してお目にかゝり仕ること敬ふく相のべ。勝基にふまつるべき我蜀の劉備にあるべきとのゝ。三度艸廬とかつてこゝに軍師をもとむる礼をなれば。いかでか苦辛とはいはんだに。先もとこそ早速の許容。ゝこびふたゝびとのゝるべし。老母はいとしてひなる。妾は始より勝基公と察しまれども。いく度もおん心をたゝしこゝに

短慮卒忽の大将か。又寛仁大度の大将かそれともなく御心底をうかゞひ
しらんがためには手ざわりさせざる心なりしが。我子なれバ一方の六将にして不足なき
嘉門を一生深山の埋木谷の朶守と朽果させんもいとゞ母がおもひなれバこそ御
奉公いたさせんと存つき度く心にもあらぬ不礼のこと致申せしにも
御堪忍あそばせしぞ心のうちにハいかばかりか勿体なく。只感涙をおし
かくして居たりしかど。老の涙そまることある。老母又桂之助にむかひ。されバ
途中にてはじめて目にかゝりし時よりて。唯人ならずとおもひしに。されバこそ
勝基公にはじめて物語りを。そのかげにてうけたまはれバ。果して
君にてましませしが。一度も御目見えいたさねバ。妾をいかで知ろ
はずや。妾も又さる縁とて支へられども。今ハ何とつゝみ申さん。君にハ
元来妾腹にて。其の御実母ハ妾が娘。嘉門が為にハ姉にて。君を産

まりて程なく身まかりたまひぬ。先奥方ハ賢女にておハせしが。露ばかりも嫉のいろ
なく奥方の御正腹と御披露ありしが。平人の身にて申さバ。君ハ妾が為に
孫なれども。腹ハとまれかくも其の子なれバ。妾が為にも正しく主君なるを
かくとそれにも奴僕とよび。打擲せしハ大罪なれども。これにハ正しく縁故
あり。此包を御覧あそばされしと差出すを。桂之助ハ始て実母の母なる事
を知りて打驚き。頓に包をひらきみれバ。短冊只一ひらの短冊あり。そもあげてみれバ。

咲匂へ柳濃の川乃花さくもうつる鏡のかげもくもらずと

といふ歌をしるせしハ。桂之助眉をしかめて。此手跡ハ見おぼえありとのたまふ。老
母小膝をすゝめ。それハ為家卿の詠歌にて。夫木集に入たる歌なるが。
そのかみ祖父君佐々木盛貞公御在京の折から。妾が夫梅津兵衛
北野の社人にてありし時。御連歌のついでに御筆をそめてたまはり

一短冊なり。その短冊の箱を以て打擲仕しに、ともかく祖父君の
おん拳をとゞめられ君がこれまでの御不行跡を戒め給ふ同然と思ふ
ふ君おん怒のけつひもつゝえ給ひ妻が打擲をたゝきのびおふ為体。
深く先非を悔給ひ武道怠れく草を得て御勘気おんわびの
種とをもおん。御心底あらわしておんことをとく胸さくるぞうり悲て
とゝせやとをまと涙をかくせ老が心を御推量ぐされし子うりも
孫のかれおれ世の人の心ぞし平人のおん身ちゝ祖母ふ孫ふと名告あひ。
娘がかゝとおろ〳〵片時も傍をたゝるを思ひれふ君臣とゞ〳〵ぶ。
ひたすらこの外なし心ふろのゝぐしとおひて悲歎ふ袖をひたし
はも良あつて涙をぬぐひふ嘉門ぶりふの秘昏を惜まると君ふ
たゝまれとおふぞ嘉門ところえひとゝの書を取出て挂之助ふ

与へけり老母又勝基ふむりひ御覧のごとく挂之助ごの今いはしの志を
あらたらるふなれば。おん館の御前おろるぐるをひとふ願ぶる。
このぶ挂之助い秘昏を勝基ふ渡し。誓首俯伏してこもふれを
願けると勝基ふ同ふひかれておん館御懇望の山秘書をたゝふ
国知ごの大功なれば御前をとゝふとをてゞて飯国とゝり
持べこのゝふべ三人ひとしく恨ぶこと恨りを初嘉門勝基ふ
むひ先年彗星あらわれたる刺星のゝ蒼ふ黄とをびたるとゝて北辰
て婦女襟を奪大乱の起るべきぎこと考たる夏を語けるべ勝基掌
をあてその先見を感じ義政公の北の臺香樹院殿い若君を濵
名入道ふ相托して安ふたてんと今出川殿い勝基を執權として武将
たゝんことをとゝれ天下二ツふわるまて已ふ大乱の起べき時節なる

夏をものがたりけるに嘉門又先年濱名が招きに応せずして山石坂猪之八等数人をおそれてにげちりぬ此山ふあとをのこしたる夏をかくしてあふ權兵孝の夏を論じ嘉門当山ふ住常ふ千早の城路をつくし楠氏の奥妙を感る夏などを物語るが嘉門ひきれそいひけるにさてもるぐ官領職のもんゑみて此山中ふ唯ひとり往来しあひ若濱名方の者ども因知つも多勢を以ことろかこるべいじまふやん君子ハ危きふちゝづゝとのいり軍慮のわどうけたるゆを度ゆを詰問ハ勝基莞爾と打笑さる時の備こゝふありこいひつ懐を探り笛をとり出して吹立るへ忽鎧腹巻ふ擘手臑楯をきびくかくして蓑笠をうち着たる荒武者ども〻この木蔭かゝこの岩かげゝりあらわれ出て数十人馳集り枝をふくませたる馬を引出して御飯舘こゝ出ぬ嘉門おどろ

あやぶもて感嘆しこれいふしへ韓信がもちひたる虚無一の謀計伏兵の策をもて其理ときやうちりこと称義の折しも以前の手負熊いろるひて此処へ走り来るを荒武者ども手槍をこりて已ふつき殺さんとしたるを勝基又ふひやれまて待べしと声かけてこゝめるひ夫六韜を考るふ文王太公望を得たる時下して非熊とのつゝ我今已ふ当世の呂尚を得て此ふぞ熊を欲せんや兄益の殺生好むばかりぞ此放やれとおつせければ荒武者ども呼こたて放ちけり勝基桂之助ふむひ和殿ハ今ちべ世をきのび飯国の時節をまこれ臣老母いきぞくく此家ふあれかさひて此ひの乗物を以てよびとるべ嘉門ハ今もぐふもちひ申ん幸雪もふりもこのこるひて馬ひきこせて乗るへ嘉門ハ馬の左りふまこぐひ大勢の荒武者ども列をたゞ

して前後をかこみ。ほりかける雪氏踏分て。蔡を分てのそぶ中く。老母ハ嘉門がいさ迄出をそ[illegible]門出をそ[illegible]ども桂之助のうとゝがしげる姿をそんとび胸ふさぐり哀び悲こ[illegible]哀べ〳〵ハ詞もなくなが。桂之助ふむひ[illegible]ふ君ふあわせまゐ[illegible]ん方あり。いざこゝをこそ奥深くこゝの上たる一間のうちふつざりひろり。これ何人ふあいまるやを〳〵どのちく〳〵の巻を読得てきゝん

○薩州府志曰梅津清景の塔梅津邑ふあり。清景ハ藤原惟隆十八世の孫也代〻院の北面たり。禪法ふ帰ー。剃髪して日辺心と号す云〻。案ふ一説是球。ぞれ是なるをまゝぞ。此考ハ巻之第四回の下ふ記をだれと誤てめしなば此ふ記せり。彼処とてしるべし

夫ハさておき爰ふ又名護屋山三郎元春ハつふハ桂之助のそふ前[illegible]茅三人の中ハとたづねて。その安否をとひ。二つふハ父の仇不破伴左衛門をたづねて宿意をとげゝと心ハ二つ有ハ一つちぎふ心をつぐ所ぞ。僕庶幾を具て。処〻方〻を尋あるゝ。ちゝく〳〵く旅中ふ月日をおくりけゝが。一夜旅店のうちふ不思議の夢をゝとゝ。その夢ハふとる此ぞ。比ー も盂蘭盆の時ふて父の亡霊をまゝぞやと香華灯燭をたとえ為。街ふ出けるふ民家一茅ふ霊棚をまゝけ。庭火をたゝて亡霊を迎る。念仏の声念珠の音街ふゝゝ。あるゝこの亡者ゝもほどひ来ておのづさ[illegible]ゝこゝるゝこの家〻ふ入る為体。誠ふ哀のあるゝさ[illegible]なり。亡者のもとゝさ[illegible]〻ふて。額ふ波をたゝたる翁もあれば。腰ふ弓を張る姥もあり。若男の幼子の手をひてもあり若女の乳ぶさをあれば嬰子ふ抱懐ふ

きるもあり。雨露ふされたる骨のみ残れる男も女もいちかねたるが影もひとすじに薄ゝ浪ゝ踏こゝあるまゝ年ふりし亡者あり頬髭生ぢげりていとあらくしき男のいまゝ肉脱もせざるあるいく〳〵あるはきのふけの亡者あり白髪を乱せる姥の亡者庭火のかげふちゝびしるあるあるの子の顔をさしのぞけてさわぐこゝあるい孫ふ心の残りたるゝ白畠ひゞゝ口ゐゞゝてゆと魂男の亡者むらひ火たく女式きれくとかつりてらゝ色げふ立たるハ後の夫とむらへたる恨と恋しかくさゝぐの亡者蜂のごとくふ群蟻のごとくふ集まれども家くの男女の目あハ少もえつざる様子なれば山三郎おのれ命おろそ亡者の数ふ入なゝと一度ハおどろく蜉蝣の一期朝露の命泡沫死常老少不定の世のあゝひ皆ゆくのごとし。二度ハ歎てたゝ

る所ふ背後の方ふ山三郎くとよぶ声虫のなく音ふ異なるぞ。山三郎身をひるがへしてこれをそれば正しく亡父三郎左衛門なれば。うちおどろいて平伏して礼を造世を去ふ親人ふ又あふ変の不思議さゝとのつゞ三郎左衛門のひけるハ汝我仇をむくゆと身を苦しめ。ふひを尽さを苦の下ふて不便ふ思ひこれまでかゝ成あらせぞ。汝伴左衛門をあとめんとあるべ。他をもとむるハ死孟なりえや京都ふ立起あんぢゞ幼年の時ひすゞけしつる女をたゞねて相まゝへたゞ。おのゞゝ伴左衛門ふめぐりあふ。ゝ支を告ん為ふまゝで待つぞ。親子ハ一世のちぎりなれば再まゝる支を得ゞしとひとて。さゝんとする袖ふまぢう。せめて今ぢばしまちあるとしふとおもへば夢さめて旅店の寝所ふ只独惘然ゝて居るうけるが五更の鐘ふ

おどろかして。やうく夢ありさまを曉し。悲歎ふ袖をしぼりしけるかて
山三郎父の告ふまうせ。心そぞろ京都ふ立越て。小幡の里ふあゆびけ
家をもとめ。麻呂もろも住けるが。ひさしく旅中ふありて。少くの
たくわへも皆めちひ尽し。素もなりひなさ為なれば持合せたる
衣服のたぐひも。おのくふ賣尽して。日ぐの住のふ(ま)至極貧
きくしなれども麻呂忠義の心ふ紀者ちとび毎日煎じ物城
賣ふ出て。身体の痩ちるをもいとわず。やうくかそけき煙をぞ
立ける

○案ふ煎じ物賣古支あり。文明の比の職人尽のうちふ又能狂言ふ煎じ物賣とふあり。藥を煎じてふるひ賣とる者ぞ

板金剛ハ金箔ノ意歟下駄ノ類職人一番ノ

十八 花柳の鞘當

其頃都五條坂ふ妓樓あり。原此所い平家の侍大将悪七兵衛景清が妾阿古屋が住ひ処とぞ。そのなごりふや。あるさの阿曽比ありて。秦樓の柳絮常ふ浪子の心を牽。楚舘の蕣華。能富翁の産を亡湯さと。これぞ賢となく愚とわく。貴となく賤となく。此妖境ふ迷来る者ひきもきくぶ。恰も蝦蟇の井ふおちいるがごとく。飛蛾の灯ふ集るふ似たり。あるさの人のほどるうちふ一きハ目だちたる打扮の侍あり。春雨ふ燕子の飛かふさを摺て三本傘の麻子紋つけたる小袖を着し。白柄の大小を掴差ふさちし。洲の与三などや製しけん手ぶくろ。たる蒔絵の一ツ印竜をおび。深編笠をまぶかふきて。絡かけどの緒をつけたる。板金剛をたきなしして。東をのぞきて立ちゆく。又西の方ふ。羽織小袖も一様ふ村

だの雲ふ稲妻の閃こたる形をきらせたるふ釘線入たる袖ぐるしかけて。
一つまへふ着ゐ。たるの鮫函の大小を関の木ふおび。目ぬき笠の下ふ懐
紙の覆面かけ。肩を首よりも高くさしそりて六方がるとふ手をおろ
る大路を邊と歩こ来る侍あり。巳ふ両人ぬけちがひける時。三本傘の
紋ぬけたるこそこの侍おやまりてかちきの侍の刀の鞘みを鞘とろさ打
あてけるが。雲ふ稲妻の侍こそこの瑞を歩とふざろ。臂をおゝかりて
怒れる体あり。こそこそその手ぬ払ひのけそ申んとこそ。かまこらまこ様
臂を伸しそ引こぶむ。たぐひふ口あ一言といこぶとのいこども。つふ刀を抜
て丁こ志とく打あひければ。群集の諸人これをうて。とい誼譁ようとさい
ぎ立。東西ふ散乱しそ。ひろぬ大路ふ只両人こうぬ。ちぐじつ。斬むこぶと
いこども。両人の猛ぬ勢ふおそれて。誰ひとりとこれをこぐむる者ちりけも。

時ふ武蔵中第一の名妓とよばれそ。その名ふかつをとなれ。神林道順が
もとの。葛城とふあそび女。籬のうちこそ此体をうそ。いそぐしく裾ふ
こそと出来り。いとあやうげなる剣の下をぐらして。両人のなぐそと
なる。鶯の囀出たるごとぬ声しそ。のびけるあん二方こもふはじまりげる
あん方とうえぐるふ。所どもこそひあつぐ。双傷ふおくびあふおぐめ
たぐひあやあくん。いとる宿恨のあ原うんまぐざ。ぬ誼譁ハ妾ふ
ありて。双方こもふおん刀をおさめたびちんやと。笑顔つくりてこぐめけり。
両人ハ葛城が理ある詞ゆ耻けん。ぐふ音やあこそけんひとしくおうあつき
ぐ刀を鞘ふ収こそて。衣服の塵を打払ひ。雲ふ稲妻の侍ハ出口の方
へいこれぬく。三本傘の侍も退ぬんぬたるを。葛城袖をうそ志ぐと
こぐ。かゝこの編笠茶屋ふあそ申ぬこの女ふ志べこ、ぬこそこうぐ。

京五條坂の
曲中ホ物ゝて
鞘當誼譁
の圖
名古屋巻之五上
名古屋巻之五上
ろらき

所がくさて物馴たる女なれば。ものく物語ーまとのひて出たれ。おとあそ
別み人もなければ。葛城かの侍ふむひ卒ホなりとのへども。こひし度古又
のたんだり。妾ハ葛城とゆもあそびなるが。ん才三本傘の紋つけまふらへ。
若名古屋山三郎どのゆへあくどやとゆふ。かの侍打閉てさそへ閉ゆびくる
葛城どのなるゆ。ゆことへ山三郎ホ何の所縁ありてたづねるや。推量の
ごとく某ハ山三郎なりとて編笠をとれば葛城新をつれくとおまもり
幼時つくれたるとども。面ハ去ることえ姓名ハあらじ。ん方なれども。
ん才ハ妾がたづねる人ゆへあくど。疎忽のだんハゆるし。あれ妾ハ大和の
国佐く木の家臣名古屋三郎左衛門どの子息山三郎どのそ。ちさなる
時のひなづけの殿なる。たづねんだるなりとて。ゆいなげホへけとば。
かの侍眉を去ハめ。去りのこるふゆん才ハ和州子守町の浪人高間久米

右衛門どの一息女なて。幼名を岩橋ゆいんどやとゆふ。葛城おどろてゆ
ゆてゆん才ハさぶらひ妾が出才をよく去りまふやとゆふ。かのどの侍掌
をこんさと打誠ホ不思議の出会なり。今ハ何をゆはくこゆ。某ハゆん
才のたづるゆ。佐く木の家臣名古屋三郎左衛門正春どの僕麻呂こ
ゆ者なり。かねて山三郎どの幼年の時のひなづけの女子なりこ閉へ。
ゆん才ハこなりける某かゆ打扮なて今日も此曲中へまりハ大ホいそれ
ホ侍支なり。先年主君三郎左衛門殿佐く木の家の執權不破道
犬が児子伴左衛門が為ホ闇打ホあひまひ。その夜ゆん館ハ騒動に
ゆりて山三郎どの浪くの才となりまひ。敵伴左衛門がもくへとまそん
なる所く方くをめぐて旅路ホ月日をすりまひ。ゆ近ごろ当国小幡れ
里ホかくて住まひ某もその所ホ住へゆとこ去りホ唄日人の噂を閉

び伴左衛門雲ふ猶妻の模様はけたる衣服を着て式曲中へ往来
を伺ひ翌敵と覘ふの所へ身を以て人の見知たる衣服抔着てゐる
人立おゐる所を徘徊さるへ共ゐろえ〳〵がへらく〳〵假人あて山三郎ごの
を伺ふと也〳〵てかつを打ふ志れ謀計ごろひ白忍某持傳へる一腰
を代る〳〵主人の紋有人の見知りたる衣服をこ〳〵へてかくたるを男
のき衣ふ打扮山三郎ごゑとゑせて。けひも式処へ来りけるふ折ふかの侍ふ
あひつざと鞘当〳〵て誼華を仕ゐけあろうふかと始終ものをぎ
深編笠おゐ面ハきとゑえざれども身のをそふ礼恰好果て伴左衛
門ふあ〳〵ぞ小指の先をえれば伴左衛門ゞ腹心の傍輩大上雅八ごゑふ
者ふ疑ひごとく式曲城ハ涙をあげし山三郎ごの妻七才の時おく
の事をうけそけひあげはる夫なれば礼川竹の身となりても片

時も忘ずひあいあくせりそれ一目相ゑんこと紙れひけれども竜ふハい
南鳥の身なれば。せんもべなく。むなしく月日をおくるけるそのち同じ
父うへを打止めひて。その身も出くへきたりあひと同じ殊更
式しく何ぞ一度ものをおふよとがもがなと神仏ふ祈てあけくれ
只その支のををれがひねけしもそうぶん身ふあひハいまこと縁の尽さる
所かりとこのひて。或ハ学〳〵或ハ舞。その身親の貧苦をえるふ悲びと
えべう〳〵式曲中ふ身を賣たる。はじめ終をこ為くふかるとかく体賤身と
なりて新合さ為も計りてぶせなれども妾が心の実をよく告ること
へて。せりそ一目あひえる吉文をかけんとありれしと涙かぐ〳〵ふ申礼
ひどきけれべ無義もその志の実を感じて。共ふ袖を連ねる葛城
又のひけるハかく礼ハ伴左衛門と申ふ支同ハ今がはじめかりさきをごの侍

山城の国
小幡の里
山三郎
貧家の
光景

のごとく紀。深編笠ふ敷かゝし。雲ふ稲妻の衣服着たる侍五人。一様ふ打扮て。頃日ゟ当国ぐ此曲中ふ往来を。そのうち一人へまことの伴左衛門かゝ〻べ〻と〻べ。庶義これを同。五人の者一人へ伴左衛門にて。残る四人へ藻屑三平笹野蟹義。土子泥助大上雁八といふ者ふ疑なし。皆助太刀〻て三郎左衛門どのをおたる者ども之正是天のちへ。あり〻と表び。壁ふ耳あり。垣ふめひめあり〻といへへ此所ゆて長物語ふ。あ〻かゝん。かゝれて又相まゝ人やさんとのひて立上り〻べ葛城神ふ〻ぐ〻。今のひ〻ことを〻ぐたのむゝあり〻べ。庶義うちのゞ紀。又編笠ふ敷かゝ〻て出ゆべ葛城へ神林が家ふゆ〻るる

巻之五上冊終